第13回　日本医師会

地域の〝灯台守〟として

地域で献身的な医療に取り組む医師を顕彰する第13回「日本医師会　赤ひげ大賞」（主催・日本医師会、産経新聞社、特別協賛・太陽生命保険）の表彰式が21日、東京都内で行われる。大賞を受賞した5人の医師の日々の活動と、功労賞受賞者を紹介する。

赤ひげ大賞

大賞受賞者（5人、順列は北から）

中村　伸一（福　井）おおい町国民健康保険名田庄診療所長
早川　富博（愛　知）愛知県厚生農業協同組合連合会足助病院名誉院長
中村　正廣（大　阪）中村クリニック理事長
高垣　有作（和歌山）国保すさみ病院顧問
間部　正子（熊　本）間部病院副院長

中村伸一氏（福井県おおい町）

「育ててくれた村」で後進育成注力

高齢化が進む福井県名田庄村（現・おおい町）の診療所に赴任したのは平成3年。当時28歳。頼れる人はいないと思っていた。だが「ベテランの患者さんは、若い医者が不安なのをよく知っている。豊富な人生経験を生かして育ててくれた」。

当時を振り返ると生意気だった。「ちょっととんがっていて、人に突っかかって論破しがちでね」。地域の人たちは、そんなドクターに「やんちゃ」を意味する方言「どろくた」をひっかけて「ドロクター」とあだ名を付けた。土地の習慣を教えてくれたり、育てた野菜を持たせてくれたり。「ちゃほやはしないけれど大切にしてくれた」。

順風満帆だったわけではない。ある女性のくも膜下出血を誤診してしまったことがある。命が危ぶまれる局面に差り、ぎりぎりで専門医に託した。果然として病院の出口に向かったとき、親族とばったり出会った。厳しく責められることを覚悟したが、ねぎらってくれた。「どんなに一生懸命やっても人は間違うことがある。お互いさまや」。

幸い女性は後遺症もなく回復。これをきっかけに「救された人間は人を救さなくてはならない」と思い至ったという。成長したドクターは「育ててくれたこの村に残ろう」と決心した。

現在は、診療所で地域医療の研修医を受け入れる一方で、日本専門医機構のワーキンググループで総合診療専門研修の制度設計に携わるなど後進の育成にも力を注ぐ。

平成11年、診療所は介護や子育て支援のほか料理教室といった文化活動の拠点にもなる保健医療福祉総合施設「あっとほーむ（むいきいき館）」に一体化した。開放的なつくりで、どこで誰が何をしているのかが見えるのが特徴だ。

自身は同館のゼネラルマネジャーと診療所長を兼務。「元気なうちからみんなが通って交流する場所。年を重ねるとどんなふうに生活が変わっていくのか、若い世代も日常的にみておくことが大事」と語る。目指すのは「親と子、孫が同じ家に暮らす大きな家」の再現という。

（文・桑博之、写真・川村撮）

なかむら・しんいち　名田庄診療所所長。昭和38年、福井県三国町（現・坂井市）生まれ。62歳。平成元年、自治医大卒。3年、名田庄村（現・おおい町）の国民健康保険名田庄診療所所長。福井県立病院外科（医長）勤務を経て10年に再び同診療所所長。11年4月から「あっとほ～むいきいき館」のゼネラルマネジャーを兼務。

早川富博氏（愛知県豊田市）

適切な治療へ「もう一歩の優しさ」

美しい山々に抱かれ、紅葉の名所としても知られる愛知県豊田市足助地区。地域の高齢化率は4割を超え、過疎化が静かに進行する、そんな地域で25年以上、診療に奔走してきた。患者の不安に寄り添い、適切な治療につなぐ「もう一歩の優しさ」を大切にしたい」と力を込める。

大学医学部を卒業後間もなく、足助病院に研修医として赴任した。忙しい毎日だったが、先輩や住民らの温かなに励まされ「伸び伸びとした新人時代だった」と懐かしむ。

その後、大学医学部などで臨床と研究に没頭、足助病院に戻ったのは平成8年、45歳の時だった。

一方、地域では、1人暮らしや夫婦2人の高齢世帯が目立つ。山間地域という地理的要因もあり、通院などに困難をきたしている高齢者も少なくなかった。

訪問診療の体制強化に乗り出したが、山中に暮らす患者もいる中、1日に回れる訪問先は限られていた。介護人材の創出、介護との連携強化も喫緊の課題だった。

ケアマネジャーやヘルパーの育成に力を入れ、情報技術（IT）を積極的に活用する必要性も提唱。医療・介護スタッフらが患者情報を共有しているシステムの構築に尽力し、平成15年には各地に先駆け、電子カルテの導入に踏み切った。

先端医療へのアクセスに困難も予想される過疎地域では、重症化予防のみならず、「健康寿命を延ばす仕組みづくりが重要」と考えてきた。健康診断のデータを解析して高齢者の健康維持に有効な体操を考案し、院内で開く健康教室などに活用。行政や地域の人たちと連携しながら、高齢者の見守り、搬送支援などの活動も進めてきた。

形作ってきた医療や自治を「持続可能なものとしていきたい」と令和元年、地域新電力会社を設立。買い取った電力を販売し、利益の一部を地域の課題解決などに活用する事業も展開している。

「これからも皆さんの力を借りながら、取り組んでいきたい」。地域への思いは強く、深い。

（文・三宅陽子、写真・南雲都）

はやかわ・とみひろ　足助病院名誉院長。昭和26年、愛知県安城市生まれ。73歳。50年、名古屋市立大医学部を卒業後、内科医として勤務。51年、足助病院に赴任した。その後、名古屋市厚生院、名古屋市立大医学部などを経て、平成8年、足助病院の内科部長に着任。10年に同院病院長となった。31年から同院名誉院長。

日本医師会

松本吉郎会長

まちづくりの一翼担う

コロナ禍による自粛期を抜け、経済活動や人の往来が活発になるに伴い、インフルエンザなどの感染症が再び猛威を振るうようになりました。大型連休となった年末年始もたくさんの患者さんが医療機関を訪れ、病院の救急外来や診療所の休日・夜間診療で多くの医療従事者が活躍したところです。

医療は社会の営みを下支えする重要なインフラの一つであり、医療のないところに人が住むことはできません。そして、医療の根幹は、健康で安心して暮らせるまちづくりであり、住民の方々と連携して地域の力を強める「かかりつけ医」として赤ひげ先生がいるということが重要であると考えます。

本賞は、そのような働きを地域で地道に担っている医師にスポットを当てるためのものですが、今回受賞された先生方はまさに「赤ひげ先生」と呼ぶにふさわしい、地域住民を愛し、また愛される方々ばかりであります。そのご功績に心より敬意を表するとともに、その魅力的な医療、まちづくりを紹介することで、各地の医療環境の整備につながれば幸いです。

日本医師会は、受賞者をはじめとする各地域で活躍されている医師の活動を支援し、今後も地域医療を守ってまいります。

太陽生命保険

副島直樹社長

ひたむきな姿勢に感銘

「日本医師会　赤ひげ大賞」を受賞された5名の皆さま、ならびに「赤ひげ功労賞」を受賞された皆さま、まことにおめでとうございます。

毎年さまざまなご苦労を積み重ね、地域で生活していく人々に寄り添い、命と向き合っていく先生方の姿勢に敬服するとともに地域医療の大切さを改めて痛感しております。

当社は平成29年から「日本医師会　赤ひげ大賞」に協賛させていただいておりますが、地域医療に向き合われ、ひたむきにご尽力されてきた素晴らしい先生方の姿勢に毎年感銘を受けております。

私たち太陽生命は社会保険制度を補完し、人々の自助自立を支えることを使命として、保険商品・サービスの提供を通じて積極的にお客さまの健康増進をサポートし、健康寿命の延伸という社会的課題に真摯に向き合って参ります。

今後も、業界最高水準のサービス・商品などをお客さまへお届けすることを通じて、元気に長生きしたいと願う全ての人々を応援していきたいと考えております。

最後になりますが、この赤ひげ大賞をより多くの方々に知っていただき、地域医療の充実や理解促進につながることを願うとともに、これからも支援させていただきます。

「日本医師会　赤ひげ大賞」
日本医師会と産経新聞社が共催し、地域に密着して人々の健康を支える医師の功績を顕彰し、広く国民に伝えるとともに、次代の日本を支える地域医療の大切さをアピールする事業として平成24年に創設された。全国の都道府県医師会から推薦された候補者から、毎年1回、大賞と功労賞の受賞者を選考会で選定し表彰する。第11回から選考委員に医学生のグループが加わり、今回は和歌山県立医科大学と琉球大学の医学生が選考に携わった。

■推薦方法と推薦基準

【推薦方法】本賞受賞にふさわしいと思われる医師1人を各都道府県医師会長が推薦

【推薦基準】病を診るだけでなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会の会員および都道府県医師会の会員で現役の医師（ただし、現職の日本医師会・都道府県医師会役員は除く）。

公式ホームページ

BSフジ特別番組
「密着！　かかりつけ医たちの奮闘～第13回赤ひげ大賞受賞者～」
放送日：3月30日（日）17：00～17：55

【主　　催】日本医師会、産経新聞社
【後　　援】厚生労働省
【協　　力】都道府県医師会
【特別協賛】太陽生命保険

人生100歳時代。
元気に長生きしながら、自分らしく生きていく。
それは誰もが望む理想の未来。
太陽生命の保険組曲Best MYWAYは、
そんなひとりひとりの生き方を応援していきます。
あなたの人生という道に、もっともっと寄り添えるように。
太陽生命の新たな挑戦の道のりもまた、
ここから始まります。
あなたの人生にベストな安心を。
太陽生命の保険組曲Best に
新シリーズ、登場。
保険組曲 Best MY WAY

元気！長生き！　太陽生命　資料請求は 0120-264-333　資料のご請求は自動音声で24時間受付しております。　太陽生命ダイレクト　さあ、保険の新次元へ。T&D保険グループ

第13回 日本医師会

患者の健康管理に尽力

中村正廣氏（大阪市）

なかむら・まさひろ 中村クリニック理事長。昭和23年、大阪市生まれ。76歳。52年、昭和大医学部卒業後、大阪大医学部で学位取得。同大医学部附属病院などで勤務し、平成8年に開業。20～24年に大阪府医師会調査委員会委員長を務め、東成区医師会では理事や会長を歴任。30年からは同会名誉会長。

信頼関係築き患者の最期に寄り添う

「住み慣れたまちで、自分らしく最期まで」。かかりつけ医として高齢者に寄り添い続けた29年間。患者の望む、終わらせ方、を大切に考えてきた。平成8年に大阪市東成区の父の病院跡地に「中村クリニック」を開業以降、上階に住居を構え、時間外も患者に対応。4年後には、敷地内に10階建ての介護付き有料老人ホームを建てた。

都会の老人ホームは、当時としては画期的だった。目指したのは「施設」でなく「家」。駅からほど近く、寝たきりになった後も家族が面会しやすく、周辺には飲食店やスーパー、公園もある。「元気に自由に出入りできる集合住宅がこの老人ホーム。安心して住み続けられる場所として始まった」と振り返る。

20年以上がたった今でも入居者とともに昼食をとり、談笑をするのが日課。その人の満足する生き方、そして納得する最期について聞くことができるのは「顔の見える」信頼関係を築いてこそだ。

在宅医療の発展にも大きく貢献した。19年には東成区医師会内に「地域医療連携室」を設置。在宅医療コーディネーターを置き、病院と地域のかかりつけ医を結ぶパイプ役にすることで、「病院完結型」ではなく「地域完結型」の医療を目指している。

駆け出しのころは「第一線で医療を続けたい」とメスを持ち、患者の退院後の生活まで考えが及ばなかった。大きく考えが変わったのは勤務医時代。がん手術を受けた患者が外来に訪れた際、入院時よりも疲弊した様子を目にしていない状況を知った。「病気を診るよりも生活を診るフォローアップが必要だと考えた」。

原点にあるのは、落下傘部隊の従軍医だった「父の背中」だ。小学生のころに46歳で早世し、医療について語り合ったことはない。命を縮めてでも患者のために尽くした父の在り方と日々の体験を伝え聞いたことが、自らも医師を目指す原動力となった。

自らの歩みを「特別なことでない」と謙遜するが、「父の思いを絶やさず輪の見える関係の中でより良い形で承継していきたい」「地域の灯台守」は、患者を見守り続けている。

（文・藤木祥平、写真・川村隆）

高垣有作氏（和歌山県すさみ町）

たかがき・ゆうさく 国保すさみ病院顧問。昭和33年、和歌山県海南市生まれ。66歳。58年、同県立医大卒。愛媛県喜多医師会病院心臓血管外科部長、中谷病院長などを経て、平成18年1月から国保すさみ病院の副院長となり、20年から16年間、院長を務めた。令和6年4月から現職。

「理想の外科医」追究 予防医療を実践

雄大な太平洋と熊野の山地が迫る自然豊かな和歌山県すさみ町の国保すさみ病院。約20年にわたって地域医療に携わり、「地域包括ケア」の観点から、予防医療を実践してきた。

出身は同県北部の海南市。活発な子供で、外傷が絶えなかった」と笑う。同県立医大では心臓血管外科を専攻。卒業後に経験を積む中で「手術を頑張ることで患者さんが良くなることに非常にやりがいを感じていた」と話す。

平成4年、国際協力事業団（現・国際協力機構、JICA）でエジプトのカイロ大に派遣され、小児心臓外科の技術指導を行った。日々手術を続ける中で、エジプトの子供たちの死亡原因は下痢や肺炎の割合が高いことを知った。心臓手術の必要性を感じつつも、多くの命を救うためには衛生環境を整えるなどの「予防」が重要なことを改めて感じたという。

「手術のための技術も勉強には、予防を行うなどして手術をしないように持っていくことが理想の外科医だと思う」と語る。

18年に国保すさみ病院に赴任。当時のすさみ町の人口は約5千人で「地域包括ケア」を実践するには理想的な規模とされていた。予防医療として肺炎球菌ワクチンの接種を国に先駆けて町独自で実施。小中学生向けの喫煙防止教室や、保育所から中学校までの校医を務めて一貫した健康管理を行うなど、健康寿命の延伸に取り組んだ。また、臓器別に縛られない総合診療や看取りを含めた在宅医療にも尽力した。

救急医療では全国で2番目に医師を運ぶための緊急車両「ドクターカー」を導入するなど、先進的な取り組みも行ってきた。多数の負傷者が出た交通事故などにも対応した。

町の人口は約3500人まで減少し、高齢率も47％を超えた。将来の日本の姿を先行した町ともいわれる。「住民や行政の協力を得て一生懸命取り組んできたことは、将来の日本で役立つことにつながると思う」と語った。

（文・小泉一敏、写真・彦野公太朗）

間部正子氏（熊本県美里町）

まべ・まさこ 医療法人美里みどり会理事、間部病院副院長。昭和3年、熊本市生まれ。97歳。25年、大阪女子高等医学専門学校（現・関西医大）卒業後、熊本大病院耳鼻咽喉科入局。32年、嫁ぎ先の間部医院（現・間部病院）で耳鼻咽喉科を開業。58年に間部病院副院長、平成19年から現職。現在も希望する患者の診療にあたる。

ゆりかごから看取りまで携わり68年

熊本市内から車で約1時間。人口約8600人の熊本県美里町は、面積の7割超を山林が占める農業と林業の町だ。この地で68年間にわたり、地域住民のゆりかごから看取りまでに携ってきた。

終戦の直前、昭和20年に大阪女子高等医学専門学校に入学。熊本県で開業医をしていた父から「女性とはいえ、メスを持って仕事をしなさい」と言われて耳鼻咽喉科を専攻した。

戦後の食糧事情も悪い中で医学を修めた。

熊本大病院に6年間勤めた後、家族ぐるみで親交のあった間部一彪氏（故人）と昭和32年6月に結婚し、低用町（現・美里町）に義父が開業していた医院で医師として勤務した。「結婚当初、主人はまだインターンで、私が義父の指導を受けながら内科も外科も、夜中の往診にも行きました。主人は産婦人科でしたので、開業後には産の助手もしましたよ」と振り返る。

高度経済成長を迎えた昭和30～40年代には、ダム建設などでにぎわい、近隣の医院とも協力しながら地域住民の健康管理に努めた。「義父も主人も家で人をもてなすのが好きで、私は菓子や料理を作って、地域の方々と交流していました。こうした時間がストレス解消になっていたのかもしれません」という。

だが、昭和50年代前後から人口減少や高齢化により、近隣の医院が次々と閉鎖を下ろした。病院のない町にしたくない。夫と二人三脚で医院を運営し、80床の間部病院とした。救急患者の受け入れや時間外の外来、往診など開業当時にも勝るとも劣らなかった。だが「本当に24時間、365日休む間もありませんでしたが、それが当たり前だと思っていました」とこともなげに言う。

平成6年には特別養護老人ホームも開設。高齢者向けの介護・福祉分野にも取り組みを広げ、訪問診療や居宅介護の支援も行う。

現在は医師の長男夫婦や孫が間部病院を支えるが、希望する患者には自ら診療にあたる。「何十年も診てきた患者さんのことは何でも分かります。古くからの患者さんが訪ねてくるのは生きがい」と相好を崩した。

（文・内田博文、写真・渋井君夫）

表彰賞

功労賞受賞者（14人）

加藤 輝夫（北海道）市立函館南茅部病院長
小笠原真澄（秋 田）大湯リハビリ温泉病院長
高玉 真光（群 馬）老年病研究所附属病院理事長
小暮 堅三（東 京）小暮医院名誉院長
土肥 直樹（神奈川）相模原市国民健康保険内郷診療所長
中村 國雄（富 山）中村記念病院理事長・院長
紀平 章代（静 岡）紀平クリニック副院長
渡辺 康介（京 都）渡辺西賀茂診療所理事長
武地 幹夫（鳥 取）江府町国民健康保険江尾診療所長
土手 慶五（広 島）安佐医師会病院長
吉田 修（徳 島）さくら診療所勤務医
今井 洋子（愛 媛）奥島病院非常勤医
麻生 宏（大 分）麻生小児科医院理事長
徳留 一博（鹿児島）日当山温泉東洋医学クリニック理事長・院長

選考委員コメント

羽毛田信吾委員（恩賜財団母子愛育会会長） 地域医療への情熱、地域に寄り添う姿勢について、自分の実感を重視して評価した。地道な努力に頭が下がる思いで、この賞により、若い医師が続いてくれる契機になればと思う。

向井千秋委員（東京理科大学特任副学長） 長年にわたり地域住民に寄り添うという従来の視点だけでなく、新たな技術を導入して地域住民の健康に寄与する医師など、新たな「現代の赤ひげ」像を示せたのではないか。

檀ふみ委員（俳優） どの先生も地域に合った取り組みをしており、評価に迷った。個人的には地域を巻き込んだ取り組みをしているかに着目した。推薦される方の平均年齢も下がっており、若い先生に地方でさらに活躍してほしい。

ロバート・キャンベル委員（早稲田大学特命教授）

今回の受賞者は、一医師だけでなく、役場やITの専門家らと組んで成果を上げた先生など、限られた医療資源の中、他の地域のモデルになるような新たな形を示してくれた。

森光敬子委員（厚生労働省医政局長） 選考は困難を極めたが、先生方一人一人の献身的な取り組みが地域医療を支えているのだと改めて感じた。90代の受賞者もおり、医療行政に携わる者として身の引き締まる思いだ。

医学生（令和6年度） 地域と連携しシステムを構築する先生たちの姿に触れ、医師の仕事は医療だけでないと知った。そういった志をつないでいける医師になりたい。

（和歌山県立医科大学）

選考を通じ、地域医療に何が求められているかや、地域への向き合い方を知り大変勉強になった。今後目指す医師像を探るきっかけになった。（琉球大学）

元気！長生き！ 太陽生命

保険で、認知症を予防!?

ひとりひとりの元気！長生き！に、寄り添う。

人生100歳時代。
元気で長生きするために、今からできること。
そのひとつが、病気を「予防する」ことです。

だから、太陽生命は病気に"備える"だけでなく、
病気に"ならないため"の保険を開発。
給付金を、検査などの予防にも活用できます。

保険に入ることで、健康をたもつ。元気になる。
そんな未来をつくっていきたいから。
太陽生命の保険は、予防に向かって進んでいます。

ひまわり認知症予防保険

※当広告では選択緩和型認知症診断保険に生存給付金特則を付加したプランを「ひまわり認知症予防保険」としてご案内しています。

［太陽生命資料請求ダイヤル］営業時間：月～日 9時～17時 ※左記以外は自動音声にて24時間受付しています。※祝日・年末年始（12/30～1/4）は休業します。 0120-04-22-33（通話無料） 太陽生命

さあ、保険の新次元へ。 T&D保険グループ